

[翻 訳]

## カナダ詩人訳詩集Ⅰ

アル・パーディ、レイモンド・スースター、  
オールデン・ノーラン詩篇より

松 田 寿 一

### はじめに

本稿は、第二次大戦以降の英語で書かれたカナダ詩の中で一定の評価の定まりつつある詩人たちの作品を訳出する試みである。わが国では比較的なじみが薄いと思われていたカナダ文学ではあるが、近年では仏語圏も含めた小説や劇文学の作品が次々と翻訳・出版されるとともに、詩の分野においてもマーガレット・アトウッド (Margaret Atwood) やマイケル・オンダーチェ (Michael Ondaatje)、あるいは日系カナダ人のジョイ・コガワ (Joy Kogawa) らの詩作品に関する論文やすぐれた訳書を目にすることができるようになった。しかしここでは、すでによく知られるところとなった上記の作家・詩人以外の作品を取り上げることで、カナダ詩の多様な姿の一端をかい間見たいと考える。訳詩に先立ち、詩人たちの履歴等について簡単にふれておきたい。

アル・パーディ (Al Purdy, 1918-2000) は、オンタリオ州トレントンに近い小村に生まれた。教育はハイスクールまで。RCAF (カナダ空軍) 除隊後は、タクシー会社経営など雑多な仕事で生計を立てた。1950年代からは、同州のロブリン湖畔に、集めた古材で家を建て移り住んだ。自伝的

エッセイ *Reaching for the Beaufort Sea* (1993) には、この時期のさまざまな挿話が盛り込まれ、詩作の背景を知る上で大変興味深い。詩集 *The Enchanted Echo* (1944) 以降、出版された詩集、散文等は40冊以上にのぼるが、自己のスタイルが確立し、作品の独自性が広く認められるようになったのは、詩集 *The Cariboo Horses* (1966) によるカナダ文学賞 (Governor General's Award for Poetry) 受賞以降である。その後は、*The Collected Poems of Al Purdy* (1986) で再び同賞を受賞するなどカナダを代表する詩人としての評価は高まり、「カナダの精神を謳う」詩人、「最後のカナダ国民詩人」とも称された。亡くなる直前まで、自作詩の出版、D. H. ロレンスやジョン・ダンのベスト・ポエムズの編纂等に精力的に取り組んだ。本訳詩集では、パーディの過去への強い関心や生命の根源の探求といった姿勢が窺える作品を選んだ。アトウッドは、「パーディは、シェイクスピアと寄席演芸の喜劇役者 (a Vaudeville comedian) の世界とを縦横に行き交って詩を書く (シェイクスピアもそうだったが)」と賛辞を贈っている。確かに悲喜劇両面の世界を併せ持つことがパーディの詩の大きさであり、魅力でもある。「ダーウィンの神学？」は *Collected Poems* から、その他の作品は *Rooms for Rent in the Outer Planets: al purdy, Selected Poems 1962-1996* (1996) から選んだ。

レイモンド・スースター (Raymond Souster, 1921-) は、トロントに生まれ、大戦中はRCAFに入隊し、4年間兵役に服した。その期間を除いては、トロント市内の銀行に勤務し、退職後も当地を離れずに暮らしていると聞く。本格的に詩作を始めたのは1950年代からであるが、その頃より詩誌の編集、出版に携わり、アトウッド、オンダーチェらを世に送り出したことでも知られる。*The Colour of the Times* (1964) でカナダ文学賞を受賞。その後も詩集を発表し続け、現在は *Collected Poems of Raymond Souster* の8巻目が刊行されている。イマジズムやW. C. ウィリアムズを思わせる詩風で、トロントに住むさまざまな層の人々の日常を

見つめた作品や人生についての感慨をさりげなく描いた小品が印象的である。アル・パーディはスースターの詩について、書き留められなければ忘れ去られるような瞬間の出来事や感情を「潜めた烈しさ」(the muted intensity) で生け捕るのが巧みだと述べている。確かに成功した詩では、都市の非人間性への怒り、無垢な愛と共感に満ちた生への渴望といった内面の感情が、切り詰められたことばやイメージに凝縮されて説得力を持つ。ときおり詩が感傷に陥りそうになることがあるが、それを上手く抑制しているのは、彼の「ユーモアとファンタジーという対の才<sup>ついで</sup>」でもある。作品は主に *Selected Poems of Raymond Souster* (1972) から選択したが、一部 *No Sad Songs Wanted Here* (1995) 等の最近の詩集からのものもある。

オールデン・ノーラン (Alden Nowlan, 1933-83) は、大西洋沿岸のノヴァ・スコシア州の僻村に生まれた。時代が大恐慌の余波の中にあった頃、生後間もなく15歳の母親に養育を放棄され(訳詩「ここにいるといい」を参照)、祖母に預けられる。12歳で学業を離れ、森林作業等に従事。貧困と偏見に晒される中、独学で文学や歴史を学び、のちに隣州ニュー・ブランズウィックの地方新聞社に記者としての職を得る。33歳で、詩集 *Bread, Wine, and Salt* (1967) でカナダ文学賞受賞。しかしその頃、咽喉癌を患っていることが判明し、何度となく手術を受けたが50歳で亡くなった。米国の詩人ロバート・ブライ (Robert Bly) は、ノーランを「怖れの感情を臆さずに表現しうる勇敢な」詩人として評価し、80年代末からのメンズ・リブ(ブライによれば、それは男たちの内奥に抑圧されている感情やイメージを解放するための運動だという)の集会で、しばしば彼の詩を朗読している。本訳詩集中の「男らしさへの通過儀礼」やその他のノーランの詩数篇は、ブライが元型心理学者のジェームズ・ヒルマン (James Hillman) らと編纂した詩文集 *The Rag and Bone Shop of the Heart* (1992) の中にも収められている。ノーランの詩には、死と向い合う人間

の悲しみと深い人生の洞察がある。永遠への憧れや死の翳りの漂う暗く切ないファンタジー、日常の些細な出来事から掬いとられた確かな愛。ノーランの詩には、素朴なことばよる語りかけの中に、読み手の感情を強く揺さぶる力がある。訳詩はすべて *Alden Nowlan: Selected Poems* (1996) からおこした。

## アル・パーディ詩篇

ベルヴィルより北の国

(The Country North of Belleville)

灌木の土地 低木林の土地——

カッシュェール郡区やウォラストーン

エルゼヴィール マックルーア そしてダンガノン

ウェスレムクーン湖の緑の土地

そこは 美とは何かを

知るに至るところ

見渡す限り否定する者も

いないところ

しかし ここは敗北の国

シシュボスが幾年も太古の丘に

巨大な岩を押し転がして登り続け

数世紀に亘り 気ままに流れ下った氷塊が

至るところに岩片をまき散らしていったところ

日に晒され 雨に濡れた

苦難の日々

打ち負かされるというだけの高貴な戦いの中で  
大仰にふるまうこともなく 自己を欺くこともなく  
時とともに真実が  
心に沁みてくるところ——

ここは 静止したときが はるかに広がる遠い国  
痩せた土地

豊かな南とは違い  
大地のまるい下腹に  
数インチの黒土だけが覆う——  
農場とは名ばかりで そこはまるで  
岩だらけの土地に一人の男が  
両親指を押し込んで

土を選び分けながら  
木々の間に

妻と

おそらくは幾頭かの牛と

さらに

はかない幻のための

ささやかな居場所を作るところ——

そこは農場が森に

戻っていったところ

今は ただ なだらかな輪郭で

うっすらとそれを跡づけるだけ——

古い囲いは 木々の間にぼんやりと漂い

潰えた夢のために集められた  
苔むした石の積み重ねは  
亡霊のように うつろな空の下で意味を失っている  
——それらは水面下の街のよう  
浮動する時という緑の波が  
それらの上にうねっている

ここはわれらの敗北の国  
しかし また  
秋には畑を掘り起こしながら  
男は褐色の畝に立ち止まり  
手をかざし 黄金色の混じる  
あの赤く浮き立つところ  
山々のいつも同じ場所に現れる  
燃えるような木々を見つめる  
幾年も幾年も  
十エーカーほどの野を耕しながら  
年老いて 畝のめぐりが  
おのれの脳の襞のようにめぐる時まで

ここは若い者たちが  
すぐに立ち去っていく国だ  
父たちが知ったことは知りたくないから  
母たちが黙した意味を探りたいとは思わないから

ハーシェル モンティゲル そしてファラディ  
湖の国土 岩の国土 そして丘陵の国

世界があるところには少しばかり隣接して  
市街地があるところからは少しばかり北寄り  
そして いつか  
われわれはそこに戻るかもしれない

われわれの敗北という国へと

ウォラストン エルゼヴィール そしてダンガノン  
ウェスレムクーン湖水地方  
そこはかつてカッシュェール マックルーアや

アルモラという高等郡区があったところ——

しかし あれから長いこと経ってしまって  
われわれは道を尋ねなければならない

見知らぬ人に——

### ドーセット人への哀歌

(Lament for the Dorsets)

(14世紀に絶えたエスキモー)

獣骨と苔跡の残る野営のための環状の杭<sup>くい</sup>  
搔きごてと槍の穂先 白鳥<sup>かたど</sup>を象る象牙の彫刻  
それらはすべて ヴァイキングたちをあつ細長い船へと駆逐して  
大地と水の精霊に語りかけた  
ドーセット人が残したものだ  
——熊の背をうち砕くほど大柄で  
恐ろしい形相をした老人たちの一枚の絵  
しかし現代の狩人たちの脳髓の中  
立派な思いと温<sup>ぬく</sup>いもの<sup>ぬく</sup>ものに囲まれて

彼らは骨の垂木<sup>たるき</sup>の陰で小さく身を潜めているが  
夜になると現れて  
星に唾をかけるほどになる

凍れる北の大洋を越え 犬を知らず  
自ら櫓<sup>そり</sup>を引いていた  
手先の器用な大男たち  
つむじまがりの巨人たち  
アザラシを狩る者たち  
彼らは 犬を連れた西方の  
それともどこか暖かな よその土地からやって来た  
小柄な人間たちにはかなわなかった  
アザラシたちは冷たい海へと帰っていった  
はたと困ったドーセット人が  
毛深い指で頭を搔いていたのが西暦1350年  
——しかしどうしてなのか分からない  
歩き回り 悲しげに  
互いに尋ね合うだけだ

「どうしたんだ？ いったい何が起こったのか？

アザラシたちはどこへ行った？」

そして 彼らは滅んでしまった

20世紀の人間たち

アパート住いの人間たち

死のネオンの統轄者たち

爆薬を手にした戦争屋たち

——ドーセット人たちは 自分たちの未来に果てに



そうした私たちがいることは想像だにできなかったろう  
なのにどうして私たちが 動く氷河の陰で  
ランプを灯してうづくまる  
600年前の彼らの姿を思い描くことができようか  
はるか昔の彼らの姿 それは三葉虫と沼地の時代ほども遠い昔  
石炭層が形成され 最後の巨大な爬虫類たちが  
ネズミサイズのは乳類を  
シューシューと音を吐いては追い払っていた頃のような

自分たちに何が起こっていたか  
彼らは知っていたのだろうか？  
熊に片足を食いちぎられて  
不具になった老獵師が  
カリブーの皮で作られたテントの中に座っている  
——それが最後のドーセット人？  
彼の名は仮にカドックとしておこう  
私たちは今 彼が2インチほどの小さな象牙に  
白鳥の図柄を彫りこんでいくのを見つめている  
死んだ孫娘の霊を慰めるためだ  
心の奥に  
いくつもの像をしまいこんだところから  
白鳥の姿を取り出してくる  
尖った石ノミを手にする  
白鳥の両翼に 平行な線模様の  
刻みを入れていく  
左手で象牙を掴み  
押さえこんだ体の重みを

脳から腕へ  
さらに右手へと伝えていく  
そうして  
彼の思いのひとつは  
象牙そのものとなる  
その彫り物は彼の傍らに置かれている  
飢えの果てに訪れる  
あの暗闇の始まりの中で  
やがてテントに  
風が吹きこんでくると  
雪が彼を覆い始める

600年経った今  
象牙にこめられたその思いには  
まだ温もりがある

## 走者たち

(The Runners)

「レイヴがオーラーヴ・トリュグヴァソン王に仕えていた頃のこと、王はグリーンランドへのキリスト教の布教を命じ、彼に二人のゲール人（男の名はヘイキ、女の名はヘイキアという）を授けた。急ぎの用立てには、鹿よりも駿足のこの二人を使うようにと王はレイヴに伝えていた。エイリークとレイヴは彼ら二人のあつかいが自分たちに任されるようカルルセフニに申し出ていた。今や、新大陸を目指し、マーヴェル海岸を過ぎた頃、彼らはそのゲール人たちを上陸させ、南の方角へ走り、その土地の様子を探り、一日と半日が経つまでに戻るようにと命じた。」

——（『赤毛のエイリークのサガ』から）

お兄さん この地の風は冷たく  
足もとの丘の土も震えています  
森はわたしたちに魔力をかけています——  
この地は私たちがここにいることも  
私たちが異郷の者だということも知っています  
私たちの友 海に身を寄せましょう  
小賢しいこびとたちが 闇の底から  
私たちを捕え 引きずりこんでしまわぬうちに

妹よ 二人の力を一つに合わせよう  
互いの体の温もりがついに一つの炎となるまで  
月が一つの影だけを見て  
太陽が重なる二つの鼓動のみを聞き  
雨が二人を分かつたぬように——

お兄さん 私はこの暗い土地が怖い  
あの故郷の島に戻りたい  
色とりどりにきらめきながら  
風に波しぶきの立つところ ああ あの太陽に焦がれています——

妹よ そんな思いを抱いてはならぬ  
一日と半日がすでに経ち  
われらは船に戻らねばならぬ  
もし遅れようものならば  
あの北の民たちが死ぬほど  
われらを鞭打つだろう——  
ないものを見つめていったい何になる

お兄さん あなたの腕に包まれ立っていても  
冷たい風が触れてきます  
北の民のルーン文字の妖しい力がついに及んできたのでしょうか  
樹々や石に刻まれた不気味なあの文字の力が  
私はこの暗い土地が怖い  
地を這う霧で 私たちは半ば亡霊のよう  
沈黙はさらに幾重もの沈黙に包まれています...  
でも ここには木の実もなって魚がないわけでもありません  
海際にはうみぎわうみぎわはうずくまり震えながらも耳をそば立てる動物たちもいます...  
この沈黙に私たちの思いを重ね  
獣たちの道に私たちの道を合流させて  
月が忘れていたものを太陽が思い出す あの暁の時がおとずれたなら...  
お兄さん こうしてはどうでしょう  
二人でこの地に留まるのです  
あの船には私たちを置いて出発させるのです——

妹よ われらはやがて死の淵へと降りていくだろう  
獣たちがわれらの屍体を食いちぎり  
いつしか風雨に晒されて白い骨と化すだろう  
平らな岩の地を過ぎ  
マーヴェル海岸をはるかに越えて  
巨木の国の向こうまで  
われらが駆けつづけて行こうとも  
恐ろしい魔力を秘めたルーン文字  
あの呪文の力はわれらに迫ってくるだろう...  
世界の果てまで走ろうとも  
われらの主人は迫ってくるだろう

お兄さん 手を取って下さい  
海辺の岩を越えて  
二人が走りつづけるときに  
このわたしたちを結ぶもの  
それこそがわたしたち自身なのです  
雨が二人に向かってたけび声を上げ  
闇が夕べをのみ込んで  
やがて朝が静寂しじまに広がりゆき  
二人の喉に霧がのぼりくるときに  
そう 二人が駆けつづけるあいだ  
駆けつづけるあいだは——

妹よ——

### 小さな出来事

(Detail)

崩れた石造りの家の傍らに  
老いたリンゴの木が立っている  
運べるものはすべて持ち去った農夫が  
唯一そこに残したものだ  
世話をするものもなく 虫に食われ  
それでも毎年実をつける  
もっともそれは酸っぱい小粒のリンゴだから  
誰も口に入れてみたりはしない  
子供たちでさえ そんなことは知っている

トレントンに行く道すがら 月に二度そこを通る  
ひどい嵐に晒されても 冬中ずっと  
木から離れない あのリンゴのことを気に留めながら  
ときには雪の帽子をのせて  
小さな金の鈴のようにぶら下がっていることもある  
たぶん どんな通りすがりの人間だって  
そんな風に 眺めたりはしないだろう  
私だって別にそこから教訓めいた話を作るつもりもない  
リンゴの木がそこにあった ただそれだけのこと  
でも なぜか  
葉を落として立っているあの木のことを覚えていて  
朽ちた果実を思ってしまう  
1月下旬のある週に  
風が太陽を吹き落とし  
大地が誰も住めない  
冷たい大部屋のように揺れるとき  
すべてを零度に消し去る吹雪の中で  
音もなく  
金の鈴だけが揺れている

**ダーウィンの神学？  
(Darwin's Theology?)**

これらの島をまるく囲む  
大いなる空の下に立つ  
そこは 神の不在によって

決して満たされることのない  
巨大な空虚が  
残されたところ  
非在の怪物によって  
完全に占拠された海と空があるだけ  
ガラパゴス諸島

### 月の呪文

(Moonspell)

話すべき私の<sup>ことば</sup>言語は忘れてしまった  
明日へと跳びこむ  
あのペリカンたちに話しかけるため  
昨日の岸辺に佇む  
アオサギたちの  
はるかな夢をかき乱すため  
イグアナのルビー色の脳髓に  
縫いこまれた秘密の呼び名を  
聞きだすために  
それはミルク  
島々に降り注ぐ  
月明かりの  
ミルク  
戸口に立ち  
耳をそばだて  
私は溺れていく 空のミルクと

あの月に照らされた脊椎動物たちの  
やさしい眩きの中に  
これらの判読された暗号は  
島に棲むものたちが  
交わす名称  
繰り返されることもなく  
私のあらわな両肩に注ぐ それらはすべて  
彼ら自身の小さな延長だ  
浮き上がるイトマキエイに  
水面が泡立ち  
月の光に輝いて  
小魚たちが震えるとき  
そう そのようにして  
いつしか私のことばは唸<sup>うな</sup>り声に  
口を軋<sup>きし</sup>らせ 舌打つ音 口ごもる声になって  
そう そのようにして  
沈める船体へ  
海の深みに潜むものたちの所へと  
原生動物たちの暗い彼方  
もうひとつの光である  
あの遠い闇に至るまで  
この肉体 この発せられる声 これらの骨を脱ぎ捨てて  
降りていこう



赤道直下のバードウォッチング  
(Birdwatching at the Equator)

赤道直下

ガラパゴス諸島のある島で  
青足<sup>フービー</sup>カツオドリたちが  
ひねもす立ち尽くす  
注ぐ太陽の光から卵を守り  
あまりに強い紫外線から  
ブルーの足を保護しながら  
ときにはオスのカツオドリ<sup>フービー</sup>が  
羽根をばたつかせ ダンスをしては  
彼の相手を魅了する そして  
つま先を上に向け  
ほれぼれと互いの足の青さについて語り合う  
唯一の敵と言えば  
1 マイルほどの島の上空に  
大きな黒い翼を広げる  
海賊<sup>フリギット</sup>グンカンドリの連中だ  
彼らにエサの魚を奪われたときは  
「このくそったれ！」と声を張り上げるのが常なのだが  
逆にもっとエサを捕られる始末  
夜が来るとカツオドリ<sup>フービー</sup>たちはみんな揃って  
しゃがみこむまるで神のお告げがあったかのように  
それとも一羽が残りの連中に  
「おーい そろそろ休む時間だぜ」とでも声をかけたのか  
ともかく一斉にへたり込む

青足カツオドリの進化に関する  
簡明なる論評<sup>コメント</sup>は以下の通り——  
もし神が沈黙をお守りになるのなら  
汝 自ら事を為すべし  
即ち 立ち上がるのも  
体を休め  
求愛し  
何羽かのヒナを産み育て  
エサを採っては  
時折のダンス それに  
ほればれ 汝の足の青さに見入るのも  
まあ <sup>フリギット</sup> そんなとこなさ  
でも それ以外に一体何がある？  
ガラパゴス諸島

イブのいないアダム  
(Adam and No Eve)

彼の名はジオシェローネ (エレファントゥパス) アビンドーニ  
黄色い顔の巨大な亀がそれだ  
彼こそ アビンドン島種の  
最後の一匹  
(だからロンサム・ジョージと呼ばれている)  
今ではチャールズ・ダーウィン研究所の科学者たちが  
つきっきりの子守り役と言うわけで  
それは大事に飼育されている

ロンサム・ジョージに一匹のメスを見つけたら  
1万ドルの賞金を出そう  
ジョージのためのメス探しに  
科学者たちは躍起になっている  
でも あいにくメスは見つからない  
ジョージの親戚たちはみな  
兄弟 姉妹 いともみんな  
厳しいおばさま 口やかましいおじさんも  
すべて島から消えていった  
そして この地上からも

(賞金目当てのハンターを召集せよ：  
人間の背丈ほどもあのサボテンのどこかに  
二本足でなく 四本足の  
動きはないか？  
20世紀をふらつき歩く  
潜望鏡のような首を持ったやつはいないか？  
実験室のガラス器具の間に  
よたよた歩くぎこちない影  
あれはマーサおばあちゃんではないか？  
マングローブの波打ち際に  
不意に眩しいあの光  
ひょっとするとあれはアビンドン島のアニー？)

何にでも値札をつけたがる人間たちは  
一匹のメスは  
十万ドルに値すると言う

しかし <sup>ふところ</sup> 懐や銀行に  
数百万、数十億ドルを蓄えていても  
金庫に亀が棲んでるわけではない  
ましてやポケットや財布には  
——実際一匹の年頃のメスに  
十億ドルを用意しても  
結果は同じことだろう

二度と泥をして <sup>はら</sup> 孕ますことなかれ  
瞬く星たちを 渾沌に注ぐ雷光を  
その証人にするなかれ  
いかなる肉体の神をもってしても  
安全な陸へとひた走る  
あの小さな両生類を再び地上に送りこむことなかれ  
アミノ酸は溶解し  
彼らの生成組織式は失われてしまったのだから  
——だから たとえどのような愛が  
帳簿の中で あるいは 芸術的な表象によって  
計量され 算出され 測定されようと  
一匹のメスの亀  
(その姿はみすばらしい古靴を思わせるのだが)  
その愛こそは 彼女だけが携えていったものなのだから  
あの暗闇の中へと  
ガラパゴス諸島

レイモンド・スースター詩篇

蒼い馬のいるところ

(Where the Blue Horses)

通りはひっそりと静まりかえり  
壁の向こうの物音が絶え  
子猫が椅子にうづくまる  
消し止められたラジオ 戸口に置かれた牛乳瓶

そして今は

眠りと 夢と 眠りへの予感のほかには何もない  
愛し合うものたちでさえ 今夜は目を覚ましてられない

それは 騎手のいない蒼い馬たちが  
誇らしげに跳ねまわる  
あの見知らぬ領土<sup>とち</sup>へと沈んでいくとき

ブルジョア  
中産階級の子ども

(The Bourgeois Child)

スラムの子になっていたかもしれない  
神の名を汚し<sup>けが</sup> 盗みを働いていたかもしれない  
酒を飲み 娼婦買いだってしたかもしれない

でもぼくは <sup>ブルジョア</sup> 中産階級の行儀のよい子に育ったから

そうなる前に もうちょっと時間がかかったのさ

ジャネット

(Jeannette)

取っ組み合いの喧嘩になって  
ジャネットは男友達を呼び入れる  
おかげで酒場はめちゃくちゃだ  
ぐでんぐでんに酔ったジャネット  
警官に一発食らわせる  
ハイになったり  
落ち込んだり  
クスリを放せないのがジャネットだ  
おかげで刑務所だって  
出たり入ったりという始末  
ジャネットは今 客を待って立っている  
ダングス通りとジャーヴィス通りが交差するところ  
いつもながらの商売をして

でも いつの日か彼女は死んで見つかるだろう  
胸をナイフで刺されるか  
それとも 薄物のストッキングで  
絞殺されて

でも 人出の多いこの通りでは  
彼女は今宵の女王だ

ピッタリとしたセーターをまとい  
自慢の胸で  
男たちの気をそそる

その黒髪と満面の笑み  
それがジャネットだ

ワールドシリーズの初日  
(The First Day of the World Series)

今朝 ベイストリートでは  
ちょっとした騒ぎがあった 女の子が  
ある信託会社のビルの十四階から  
飛び降りて 十階下の屋根の上に  
落ちたのだった

彼女はすぐには死ねなかった  
こんなにも勇敢で つらい決断のあとでさえ  
もうしばらくは  
苦しまなければならなかった

人間の<sup>からだ</sup>身体というものは  
何かと  
思い通りにはならないものだ

「かのブリキのヤカン」<sup>ケットル</sup> ありき  
(Here's "The Old Tin Kettle")

君にそのことを教えてあげたら  
ファンタジーとユーモアという<sup>つい</sup>対の才を発揮して  
きっと、こんな風に言うと思う、

「あれはきっと、今はなきシャンプラン探検隊\*のつわものが、  
血に飢えたイロクワ族から身を軽くして逃れようと、途中で  
脱ぎ捨てたものにちがいない」なんてね。

だからこうして芝生の上に坐りこんでいるんだ、  
兜も失い、輝く<sup>かぶ</sup>被り物も捨て去った、ただの、  
ありふれた、何とも古びたヤカンとして、  
でも、そこには、うち捨てられた人々や、動物たちや物の中でだけ出会う、  
あの哀れみを誘うまなざしがある、だから私は外に出て、それを拾い、家  
の中へと運びこむ——あやうく感傷的になりそうになって。

\*シャンプラン (Samuel de Champlain, 1567?-1635) フランスの探検家。ケベックを建設した。

レイク・オブ・ベイズ  
(Lake of Bays)

「臆病なんかじゃないわ私...」  
その痩せた十歳の女の子は



ドーセット橋の途方もなく高い手すりの上で  
バランスをとると

にわか

50フィート下の水の中に  
身を投じた。

「あんな子はね、  
けして淑女<sup>レディー</sup>になんかはなれないわよ」  
母は立ち去るときにそう言った。

でも、私は覚えているだろう  
あの褐色の体が小石のように落ちていったことを  
何人もの、何人もの淑女<sup>レディー</sup>のことは  
忘れ去ったずっとあとも...

### 窓の外のクモ

(The Spider Outside Our Window)

わが家の窓の外に棲むクモには  
やっかいな問題が生じていた。ずんぐりとした  
バラの花弁が落ちてきて、ペッタリと  
彼の網にひっかかり、何とも満足げに  
居座っているのだった。

はたしてどうしたものか。味見をしても  
チャーリーの口には合わず、おまけに、場所を取りすぎて

これでは商売は上がったりだ。

でも悲しいかな、おかげで、以前には欠いていた  
ちょっとした気品が漂うようになり、だから、彼は  
何とも決めかねて、動かさずにいたのだった。

でもある日、ひらめいた！

彼は虫血<sup>ちゅうけつ</sup>ペンキで看板を作り、  
得意げにそれを立てかけたのだった、

ようこそチャーリーのバラ園へ  
いつでも友と出会えるところ

### 最初の二つのドングリ (The First Two Acorns)

本当に大切なのは  
はじめの二つのドングリだった。

最初のやつは、  
一番上の枝から放たれて、  
葉っぱのふるいを通りぬけ  
ビューンと一気に落下した  
(通った後も大気はブルブル震えたままだ)  
そして、形がへこんでしまうくらい  
烈しく地面にぶち当たった。

二番目は、と言うと

別にどんな高さの枝から落ちてもかまわない。その夜、  
ぼくらに聞こえてくるのは  
草に落ちるパサッという何ともはっきりしない音だけで、  
控えめに言ったって、はじめの落下と比べたら、  
全くもって冴えなかった。

でも、それこそが、通りの木から木へと伝う  
ときを知らせる合図だった、  
だから、誰もが眠りにについている、  
風のない、穏やかなこの夜更けに、  
次に何が起こるのか  
それが一体いつなのか  
思い巡らしている私がいる。

### 冬の貧者たち

(The Poor in Winter)

<sup>くちばし</sup>  
嘴と体を一つにして飛び続ける

あの一羽の雀

彼はどんなにか餌を

求めているだろう

あの林檎の木の

凍りついた皮を 彼は

突き破ることはできないだろう

猫と私

雀の動くさまを追いかけている

温かい

眺めのいい窓辺から

鳥を見ていた

(I Watched a Bird)

風に吹きつけられる鳥を見ていた

広げた両翼の動きを止めたまま

なすすべもなく翻弄されて

空を漂う哀れな<sup>もの</sup>物体のような

風に<sup>ほう</sup>抛られる鳥を見ていた

<sup>あら</sup>抗がうことも 声を発することもなく

ただ 限りない空の拡がりに身を任せて

あの大きいなる神秘に魅せられているかのような

夜明け間近の隣人の鳥たちに

(To the Birds of My Neighborhood Just Before Dawn)

そうだね——6時前には

夜が明けると言っていたけれど

この通り ぼくはちょっと寝坊したね

それにしても にわかにはさんざめく  
数千の君たちの囁り  
純粹な喜びの歌声はなぜだろう

私も歌をうたうものの一人  
聞いてもらいたい

## オールデン・ノーラン詩篇

キリスト  
(Christ)

バルサムの樹の高みからキリストが行くのを見ていた  
二羽のカラスが枝の上で人によく似た笑い声を立てた。

キリストは丸太の塀を登って越えると  
紫色の裾を引きずりながら

黄橙色の穀物畑を横切っていった。とても近くを歩いていたから、  
衣擦れの音が聞こえ、赤い顎鬚の何本かさえ  
はっきり見えたほどだった。一度も見上げることもなく、  
私の下を通り過ぎ、山腹の牧場に続く門に着くと

キリストはみるみる縮んでいった、  
最初はおぼしほどの大きさに、そして一本の指、

やがては丘の斜面の小さな紫色の斑点になった。

そしてとうとう、森のはずれで完全に

消えてしまった。

## 処 刑

(The Execution)

死刑執行の夜

戸口にいた男が

私を検屍官と間違えた

「新聞社<sup>プレス</sup>のものだ」と私は言った

しかし彼は取り合おうとしなかった

彼は私を別な部屋に案内し

そこには郡保安官が待っていた

「遅かったですな 神父さん」

「そうじゃない 私は<sup>プレス</sup>記者だ」

「勿論ですとも プレス神父」

私たちは階段を下りていった

「ああ エリスさん」と補佐官が言った

「記者だ！」私は叫んだ

彼は私を

黒いカーテンの向こう側へと小突いた

しかし 眩<sup>くら</sup>むような光のせいで

向かいに座っている  
男たちの顔を  
私は見ることはできなかった だが きっと  
彼らからは私が見えているはずだ！

「おい！」私は泣き叫んだ。「よく顔を見てくれ。  
誰も私のことがわからないのか！」

そのとき 頭巾が下ろされた  
執行人が耳元で囁く 「面倒をかけるんじゃないぜ」

アメリカヘラジカ  
(The Bull Moose)

紫色に樹々の霞む山から下りてきて、  
白いトウヒとヒマラヤ杉の森をふらふらと  
アメリカカラマツの沼地をよろめきながら  
雄のヘラジカがやってきて、  
ついに牧場の柵のそばで立ち止まった。

戻って行くには疲れすぎていた、それとも、  
もう行き場がないと知ったのか、牛たちと一緒に立っていた。  
麝香じやくこうの香りに死の臭いをかぎつけた牛たちは、  
血の神を奉る儀式の仮面のようなシカの大きな頭を見て  
野原の端へと移動して、じっと様子を窺った。

それを聞きつけた近隣の人で、午後には  
車が道に連なった。子どもたちはハンノキの小枝で  
からかっていたが、  
老いた我慢強いコリー犬のように、  
ヘラジカは、  
じっと見つめるだけだった。  
婦人たちは、<sup>いち</sup>市からでも逃げてきたのかしらね、と互いに頷きあった。

教区に一番古くから住むある男は、牛とくびきで繋がれて  
畑を鋤いたヘラジカのことを思い出した。  
若者たちは声をひそめて笑いながら、ヘラジカの喉に  
ビールを注ぎこもうとし、連れの女の子たちは記念に写真を撮っていた。  
ヘラジカはされるがままに、ダニにただれた脇腹をなでさせ、  
ビンで顎をこじ開けさせて、くすくす笑う女の子には、アザミをつけた  
小さな紫色の野球帽を自分の頭に被らせた。

監視員が来たときも、こんなにかわいい毛むくじゃらのヘラジカを  
撃ち殺すのはひどいことだとみんなは口々に言い合った、  
ヘラジカは、子どもたちと一緒に寝かしつけることのできるような  
ペットのように見えたのだ。

だから彼らは撃つのは控えていた。しかし、川の向こうで  
夕日がまさに沈もうとしたときに、そのヘラジカは断頭台の王のように、  
揮身力で、角を起こし、しっかりと立った。  
それには銃<sup>ライフル</sup>をかまえた監視員たちでさえ、あとずさりしたほどだ。  
ヘラジカが大きな吼え声を上げたとき、人々は車の方へ逃げた。  
ドサッとシカが倒れたとき、若者たちはみな長くクラクションを鳴らした。



## 出稼き労働者

## (The Migrant Hand)

容赦なく照りつける太陽の下、畑の土にまみれ、  
 何千年もの間、何百万もの籠と荷車とトラック分の  
 玉ネギや綿花、それともカブのために、この老いた男は  
 腰をかがめてきたのだろうか。でも、もし君が  
 そんなふうに尋ねても、彼はあいまいに言葉を濁らすだけだろう、  
 そんな問いは彼には疑わしいものだから。  
 本当のところはこうなのだ。楽園を追われたあの日から、  
 アダムは葡萄を摘み始め、古代のファラオが彼をギリシャに売りとばし、  
 セルジューク人のためにはニラネギを、  
 トスカナ人やゴート人、ノルマン人にはニンニクを、  
 そして巡礼始祖ピルグリムファーザーズには、かぼちゃとトウモロコシの取り入れを続けたが、  
 そんなことはみな忘れてしまっただけなのだ。  
 ついこの十時間に耐えてきたブユと炎暑、  
 そして二百樽のジャガイモのこと以外の過去は  
 すべて忘れていただけなのだ。

## ぼくはイカルス

## (I, Icarus)

空を飛べたときがあった。本当だとも。  
 もっとよく思い出したなら、それがいつ頃のことかだってきつと言える。  
 ぼくの部屋は家の奥の一階にあった。  
 ベッドは窓に向いていた。

毎晩ベッドに横になると、ぼくは飛ぶことに意識を集中させたんだ。

それは、なかなか大変なことだった。

体が浮き上がるのを感じるまで

一時間もじっとしていたときさえあった。

ゆっくり、ゆっくりと浮かびながら

やっとのことで床の上に3、4フィート浮上する。

あとは、泳ぐような格好で、窓に向かって

体を進ませていくんだ。

外へ出ると、だんだん高く舞い上がり、牧場の柵の上を、

物干しの上を、牧場の向こうの暗い、

不気味な木立の上を越えていった。

そんなときはいつもどこからか、風が奏でているかのような

フルートの調べが流れていた。

ときおり歌声が聞こえることだってあった。

むかし、むかし

(Long, Long Ago)

その姿を目にした瞬間<sup>とき</sup>から

私はずっとそのインディアンの女を見つめ

ひとときも目を離すことがなかったように思う

体の三倍もの大きさの

色とりどりに縫い合わされた大包みを引きずりながら

サウスマウンテン

「南の山」を下り

リトルブリッジ

「小さな橋」を渡り

ノースマウンテン

「北の山」を登ると

私たちの台所にやって来て  
女は包みの結び目をほどき  
部屋中溢れんばかりに籠を広げたのだった  
——サクランボ色の籠  
キャベツ色の籠  
11月の空の色の籠  
どの籠にも  
また別の小型の籠が入っていて  
最後は糸と指ぬきほどしか入らないような  
それは小さな籠になっていたのだった

そして彼はエジプト人たちに聞こえるように大声で泣いた  
(And He Wept Aloud, So That the Egyptians heard It)

祖父の家には、  
見かけたこともないような  
マルハナバチほどもある蠅が  
めちゃくちゃな蹴球しゅうきゅうでもしているかのように  
練乳色の窓に群がっていて、

かけたバターの小皿から  
ニジマスとジャガイモを盛った  
ブリキの皿へ  
蛙跳びを繰り返し、  
口へ運ぼうとする  
二人のパンをつまみとると、

ざらざらした<sup>もろ</sup>縦の木のテーブルの上に降りて来て、  
跨るように重なり合っていた。

汚らしさというよりは  
その数と執拗さ、そして——

そう、私たちは認めなければならない、  
たとえ真実に出くわしたとしても、それを胸に秘めてしまうなら、  
詩には何の意味もないことを——

蠅たちの象徴的な意味、  
それはパール・ズィバブ神\*  
貧しき者と見捨てられし者の神だ。

だから、ぼくは怒りを抑えきれなくなって、  
祖父の読んでいた新聞をひったくり、それを右に左に振り下ろしながら、  
窓の敷居が叩き潰された死骸で溢れ、  
ちぎれた<sup>はね</sup>翅が  
ぼくの手にかぶりつき、  
部屋全体が恐怖でブンブン<sup>うな</sup>唸り出すまで、  
狂ったように襲いかかったのだった…。

狼狽し、怯えた祖父は、  
オロオロと私の傍に寄ってきた。

「こんなにハエの多い年は  
みたこたぁねえ。」

まるで今まで彼もずっと蠅のことを気にしていたかのように！

老いた祖父の弱々しい声はあまりに哀れ気で、

ぼくは丸めたこん棒を木箱に投げ入れ、腰を下ろした、

ぼくは祖父に詫びたかった。

押し黙ったまま、二人が食事を続けたとき、

その静寂を壊すものと言え、再び自分たちの世界を

構築し始める蠅たちの、かすかな、かすかな唸り声だった。

\*バール・ズィバブ神 蠅の神。バール (Baal) とは古代シリアの太陽・山・泉などに無数にいる神で自然の生産力の象徴。ズィバブ (Zebub) とはヘブライ語で「蠅」の意。

### 手術室で

(In the Operating Room)

「漕げよマイケル

岸辺に向かって

ハレルヤ！」麻酔医が歌っている

そして 私は彼の腕が

とても毛深いのを知って

驚いている——

こんもりと 赤く縮れ、

さながら手首から

肩にかけての

彼の<sup>からだ</sup>肉体から

丈の低い銅貨色のシダの茂みが

生え出ているかのように

私は

手を伸ばし  
その麻酔医の  
毛深い腕に  
触れてみたいと思う  
なぜならそれが  
この世で  
見届ける最後の  
生きた存在になるかもしれないから  
だからそれが  
色白で無毛の腕ではなくて  
うれしく思う  
——しかし もし私が望むままに  
手を伸ばし  
一掴みの彼の体毛を  
私の人差し指に  
巻きつけたら  
彼らは薬のせいで  
気が変になったのだらうと思い  
私がもし生き延びていたら  
思い出して  
笑われてしまうかもしれない  
だから私は 必死で  
その麻酔医の口ずさむ歌に  
意識を集中させている——  
「ヨルダン河は  
濁って冷たい  
ハレルヤ！」

やがて  
すべてが  
朦朧として  
もう かまいやしない という気になって  
今や  
小さな炎となって  
噴出する彼の体毛に  
手を  
伸ばして  
触れようとしたとき  
両腕は  
革紐でしっかりと  
手術台に  
固定されていたことに  
気づく

### 不思議な裸の男

#### (The Mysterious Naked Man)

クランストン通りで  
怪しい裸の男を見かけたとの通報があってから  
警察は派手なライトとサイレンでお定まりの現場検証を始めている。  
付近の人ほとんどみな外に出てくると、やじ馬たちも  
わが身に災難が及ぶことがないとわかり、いつものように  
胸を躍らせながら話している。  
「どんなだったかね、やつは」と警部補は聞く。

「よくは覚えてはいないが、裸だったことは確かだ」と目撃者は答える。  
警察犬も使われるらしい——なぜなら、この一件は  
よくある破廉恥行為ではなさそうだし、  
牛乳配達員が見かけてからも  
男は何度も目撃されているのだから。そして今  
たそがれの空は紫色に変わり  
口づてにニュースが伝わって  
子供たちが残された夕暮れの時間を夢中で遊ぶころになり  
他の地区からもパトカーが応援にかけつける。  
果たして、あの不思議な裸の男は  
どこかのゴミ置き場の裏でかがんでいるのか それとも  
だれかの庭先でうつ伏せのまま横たわってでもいるのだろうか  
ひょっとするとどこかの木陰に潜んでいて  
港から吹きつける強い潮風が  
彼の裸身を鞭打っているのかも知れない。  
しかし望んでいたことを  
すべて成し遂げた今  
彼はただこのまま静かに眠ってしまうか  
それとも死んでしまうのか  
それとも空へスーパーマンのように飛んで行けたらと思う。

### ジョニーの詩

(Johnnie's Poem)

見て！ぼく詩を書いたんだ！

ジョニーはそう言う



その詩を私に見せる

それは

亡くなる前の祖父のこと

そして入院中の

私のことだ

私は泣き出したいくらいうれしくなった

なぜなら、上手く書けているかなんて

問題ではないから

大切なのは父である私のことを

彼がわかってくれているということ

詩には、自分が一番深く、そして強く

感じたことについて書くのだと彼に話した父親のことを。

### 男らしさへの通過儀礼

(The Rites of Manhood)

雪は激しく降りしきり、タクシーはもう走っていない。

夜番の仕事を終え、私は家路についている、

真夜中もとうに過ぎ、町全体が私のものになる、そのとき

通りの向こうに、まだ若いアメリカ人の水兵が

女の子のそばに立っているのを見る。彼は、

二人が凍りついてしまわないうちに家に送っていかうとし、

その娘の住まいを聞き出そうと怒鳴っているが、彼女は

舗道にしゃがみ込んだまま、起き上がろうとしない。

二人は酔っぱらっていて、たぶんそんなことだと思うのだが、

どこかの酒場で、彼がその娘に声をかけて、

やがて仲間と分かれ、二人だけになり、  
最初のうちは、声をかければついて来るような  
女たちでいっぱい港町で、  
気ままに羽根をのぼして愉しむのもよかったが、今はただ、  
警官か沿岸警備員に呼び止められないうちに  
彼女をどうしたらいいのかという  
途方もなくやっかいな問題を解決したいと思うだけになった。  
——だが、この場をさもしいものにしない何かがあるとすれば、  
それは、今、まさしく彼の心の中で起こっていることだ。  
もし仲間の水兵がここにいたら、  
そこに彼女を置き去りにして、  
そのうち、そんなこともあったと、笑って済ますこともできるだろう、  
だが、ここにいるのは彼ひとりだ、だから、  
このうしろめたさは取るに足りない思いとして  
忘れてどこかにしまい込むわけにはいかないのだ。  
彼は、今、わかりかけている、  
大人の男になるということはどういうことか、そして、それが  
ほんの数時間前に思い描いていたのとは、いかに違ったことなのかと。

ここにいるといい

(It's Good to Be Here)

どうしようもないわ、と彼女は  
彼に言った。それが、  
私について語られた  
この世で初めてのことばだった。

それは1932年のこと、  
彼女はほんの14歳で  
彼のような男たちはみな  
一日働きづくめでも  
やっと1ドルかそこらの時代だった。

キニーネ\*があるわ、と彼女が呟いた。  
馬鹿を言うな、と彼は言った。

すると彼女は泣き出した、そして  
どちらも長く押し黙り  
そのうち  
二人は声を荒げるようになり  
互いにどなりあうようにさえなった。  
そして再び長い沈黙が続くと、やがて  
とても静かに話し始め、最後に彼が、  
ともかく二人でやっていくしかないな、と呟いた。

私はといえば  
彼女の胎内<sup>からだ</sup>の暗闇にうずくまり、  
心臓は高鳴っていた。

\*キニーネ 解熱薬・抗マラリア薬であるが、子宮を収縮させる効果があることから、墮胎を引き起こす薬物として古くから民間でひそかに用いられることがあった。

そのホテルには恐ろしい翼棟がある

(There Is a Horrible Wing to the Hotel)

そのホテルには恐ろしい翼棟がある。

そこではぞっとするようなことが起こっている。

便所は流れない。

床には大便が、

浴槽には小便が溢れている。

ある部屋で私は犬が

子猫を食いちぎっているのを見た。

でも人々はそこに住んでいる。

私を盗人と間違えた

あの太い腕の若者もそう、

あのとき彼の強さを知って、

抵抗してもムダだと思い、諦めていなかったなら、

私は彼のこん棒で

ひどく殴られていたはずだ。

その後は彼とは親しくなったが、

ある男の子が現われて、

彼の部屋から

安物の銅か真鍮製の

小さな三角形の品物を盗み出し

私にそれを手渡したのだ——

たぶんそれは何かのトロフィーに

ついていたものだった。

若者がそれを探しにきたとき、

私は怖くて、隠してしまった。

私はその子が彼にぶたれるのを見つめていた。

でもある晩、私たちは屋上で

小さな動物の形の風船を空に放った。

それはクマや、鮮やかな赤のキリン、それに青いサイなどの風船だった。

風船は、夜の空高く飛んでいった、

私は高い所は怖いんだけど、みんなと一緒に

見つめていると、それらはとうとう、

あの回転する巨大な通風筒の闇の中に消えていった。

風船はとても高く、とても速く飛んでいった、

私はそれほど自由なものを見たことはなかった。

### 大きな出来事が起こった

(Great Things have Happened)

私たちは人生で起こった

大きな出来事について話していた。

「それはやはり月面着陸かな、

それが生涯で一番大きなことさ」と私は言った。でも、

もちろん私たちは、だれひとり正直に話してはいない。

本当は、月に降り立つことなんて

1963年のある晩のことに比べたら  
私にとって十分の一の意味もない  
そう、それは、今ならお金さえあれば、  
誰もが越してしまうような通りで、  
ビクトリア朝時代の昔には、  
ある豪商のものだったとか言う屋敷の片隅に、  
三部屋を間借りして住んでいたときのこと、  
(台所が、確かちょうど、以前の屋敷の物置<sup>クローゼット</sup>だったはず)  
その夜、クローディン、ジョニー、そして私の三人は  
朝の4時半過ぎに目を覚まして  
いっしょにシナモントーストを食べていた。

「それだけかい？」と聞き返したくなるかも知れないね。

いや、でもね、私たちはその朝、眠気で何だかぼんやりとした感じで、  
そして、そう、窓の下では街路清掃人たちが  
イタリア語で話しながら、機械を動かし  
作業をしていて、なぜか  
不安を感じさせるものは何もなくて、すべてがいつもと異なっていて、  
湯沸かしでさえ昼間とはどこか違って  
ヒューヒューと鳴っていた。  
パンだって全く違った味がして、  
バターもちょっとした冒険で、コショウの代わりに  
パプリカがテーブルに置かれているような感じ。まるで  
訪れたことのない国で、ときおり感じるような気分。  
でも、それともひとつ違うのは、その国には誰もいなかったこと、  
生きていることのすばらしさに半ばうっとり酔いしれて、

愛にすっぽりとくるまれた三人を除いては、誰もそこにはいなかったこと。

ここからはそこには行けない

(You Can't Get There from Here)

いつだってライラックの灌木が見える——ライラックは私の子どもの頃の匂い、ひんやりとした川に沿って、子馬が駆け出したくなる匂い、すばらしく自由な私の心の中の匂い——いつも赤いバラの茂みがあって、ときには、林檎の木や果樹園でさえも、そして、そこでは鹿が風に落ちた果物を食<sup>は</sup>んでいる。

背丈のある草の中では

羊毛を刈る大鋏<sup>おおばさみ</sup>に出くわすかもしれない、鋏の化け物のようなものだけれど、それだってピンセットのように一つに繋ぎ合わさったものだ、

そして、二股<sup>ふたまた</sup>の斧、

それも片側はハンマーだ。もしも君がその廃家に足を踏み入れたなら、倉庫に続く階段を登りつめたところに、きっと床に置かれた一隻の帆船の模型を目にするはず、3フィートの船体で、帆柱<sup>マスト</sup>は倒れ、索具装置は腐食して、でも、私たちはそこにいる、積まれた野菜箱の暗がりから見つめながら——灯される明かりはそこにはない、それに、君だって、私たちを見つけるためのランプを持ってはこなかったろう、でも、私たちには君が見える。そう、私たちには君が見える。

### テキスト

- Nowlan, Alden. *Selected Poems*. Eds. and intro. Patrick Lane and Lorna Crozier. Concord, Ontario : House of Anansi Press Limited, 1996.
- Purdy, Al. *The Collected Poems of Al Purdy*. Ed. Russell Brown. Toronto : McClelland and Stewart, 1986.
- *Rooms for Rent in the Outer Planets : Selected Poems 1962-1996*. Eds. Al Purdy and Sam Solecki. Madeira Park, B. C. Canada : Harbour Publishing, 1996.
- Souster, Raymond. Ed. and intro. Michael Macklem. *Selected Poems of Raymond Souster*. Oberon Press, 1972.
- *No Sad Songs Wanted Here*. Oberon Press, 1995.

### 参考文献

- Bly, Robert, James Hillman, and Michael Meade, eds. *The Rag and Bone Shop of the Heart*. New York: Harper Perennial, 1992.
- Geddes, Gary & Bruce, Phyllis, eds. *15 Canadian Poets*. Toronto : Oxford University Press, 1970.
- Lee, Dennis. "The Poetry of Al Purdy : An Afterword." In *The Collected Poems of Al Purdy*. Ed. Russell Brown. Toronto : McClelland & Stewart Inc., 1986, 371-91.
- MacKendrick, Louis. *Al Purdy and His Works*. Toronto : ECW Press, 1990.
- Nowlan, Alden. *An Exchange of Gifts*. Ed. and intro. Robert Gibbs. Toronto : Irwin Publishing, 1985.
- Oliver, Michael. *Alden Nowlan and His Works*. Toronto : ECW Press, 1990.
- Purdy, Al. *Reaching for the Beaufort Sea*. Ed. Alex Widen. Madeira Park, B. C. Canada : Harbour Publishing, 1993.
- *Starting from Ameliasburgh : The Collected Prose of Al Purdy*. Ed. Sam Solecki. Madeira Park, B. C. Canada : Harbour Publishing, 1995.
- Solecki, Sam. *The Last Canadian Poet : An Essay on Al Purdy*. Toronto : University of Toronto Press, 1999.
- Woodcock, George. "On the Poetry of Al Purdy." In *Selected Poems*. Ed. and intro. George Woodcock. Toronto : McClelland & Stewart Inc., 1972, 9-15.



—— “On Purdy’s Galapagos.” in *Inside the Poem*. Ed. W. H. New.

Toronto : Oxford University Press, 1992, 177-85.

クララ・トマス著、渡辺昇訳『カナダ英語文学史』三友社出版、1981.

マーガレット・アトウッド著、加藤裕佳子訳『サバイバルー現代カナダ文学入門』

御茶の水書房、1995.